

資料

「老い」とは？ ～認知症のない要介護高齢者への インタビューから～

旭川敬老園*

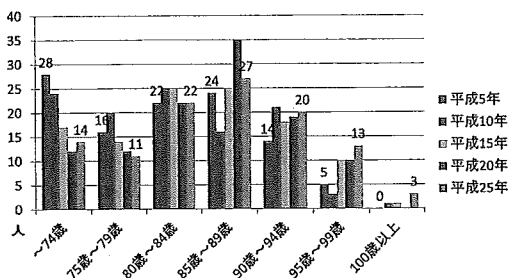
花田 達紀・森 繁樹

キーワード 高齢者福祉 老いの文化 老いの時間
サクセスフル・エイジング 超高齢社会

1. はじめに

総務省の人口推計によると、日本の人口は減少傾向にあるが、平成37年をピークに高齢者人口は増加し、特に75歳以上の人口が増加していくことが予想されている。特別養護老人ホーム（以下、特養）における入居要件は原則65歳以上の者となっている中、平成25年度版介護サービス施設・事業所調査によると、全国の特養入居者の内、約6割は85歳以上の方である。旭川敬老園においても、入居者の高年齢化は年々増しており、今後もその増加が予想される（表1）。また、全国の65歳以上の高齢者の内、認知症の者は推計15%。85歳以上では40%超が認知症とされている。平成25年度版介護サービス施設・事業所調査によると、特養入居者の約7割は日常生活自立度ランクⅢ以上の認知症を有している。しかし、旭川敬老園においても、平成27年11月末時点にて、99歳以上の方7名中、4名は年相応の物忘れはあるが、認知症はない現実がある。

表1 旭川敬老園入居者年齢推移



社会福祉法人旭川荘（理事長 末光 茂博士）

* 特別養護老人ホーム

筆者自身、特養において、介護職員を経て生活相談員として働く中で、介護技術や高齢者虐待について研究を行ってきた。しかし、これらは介護者目線の話であり、高齢者自身にとって生活の質とは何か。人間が老いるとは何か。老いのとらえ方も80代・90代の方では、その意味が異なるのではないかと疑問に思い、認知症のない高齢者に話を聞き、「老い」について考察を行った。

2. 調査方法

X特養に入居する認知症のない入居者2名と、X特養短期入所生活介護（以下ショートステイ）を利用しながら在宅生活を継続する認知症のない利用者2名にインタビューを行った。調査期間は、平成27年10月1日～10月30日であった。倫理的配慮として、事前に調査について説明を行い、同意を得た上で回答を得て、個人情報・秘密保持について配慮を行った。

3. 結果

1) 施設入居者Aさん

(1) 施設入居者Aさんについて

80代男性 要介護区分4 認知症なし

町工場で定年まで働く。70代で妻が死去し、以後1人暮らし。施設へ入居する1年前までは、車の運転もしていたが、入院を機に車椅子生活となる。子ども夫婦が近隣に住むが、本人の家も含めエレベーターのないマンションのため、自宅での生活が困難となり入院先の病院より施設入居となる。

(2) インタビュー結果

急に車椅子生活になり、家では生活できなくなった。歩けるようになれば自宅に帰りたいと思うが、X特養では、トイレ・食事・入浴すべてにおいて、普通の生活をさせてもらっている。映画上映など、クラブ活動が充実しており退屈がしのげるのが良い。病院へ入院中は、高齢者だからとベッドに4点柵をされ、自由がなかったが、今は何でも自由にできるのが良い。

2) 施設入居者Bさん

(1) 施設入居者Bさんについて

80代女性 要介護区分3 認知症なし

50代で夫を亡くし、以後1人暮らし。70代では、配食サービスやデイサービスを利用し生活をする。

その後、息子のいるY県へ転居し同居するも転倒、骨折により車椅子生活となる。その後は、施設を転々とし、本人の強い希望で地元Z県にて特養入居となる。

(2) インタビュー結果

以前の施設では、食事やトイレなど何をするにも、エレベーターや行列に1時間近く並ばなければいけなかった。X特養では、自分の部屋を出るとすぐリビング・トイレ・お風呂があるので、生活が楽になり、自由な時間が増えた。県外にいた時は、方言が違い、他者と話をするのが辛かった。地元Z県へ帰って来たことが嬉しい。

3) 在宅生活を継続しているCさん

(1) 在宅生活を継続しているCさんについて

90代女性 要介護区分3 認知症なし

80代までは、自宅で畑をしながら生活をし、自宅にて夫を看取る。その後本人もショートステイの利用を開始。自宅で生活している際は、実の娘達が交代でお世話をしてくれている。

(2) インタビュー結果

デイサービスの様な日帰りのサービスは、移動だけでも体力的にしんどい。それに比べてショートステイは、日中でも居室のベッドで休むこともでき、デイサービスのように時間ごとに、レクリエーションに参加する必要もなく、編み物など自分のしたいことがしたい時にできるのが良い。1人暮らしは困難であり、自宅に居る時は娘達が同居し、よくしてくれるので、生活が成り立っている。実の娘でも気を使うので、ひと月の半分をショートステイで生活する程度が丁度良い。

4) 在宅生活を継続しているDさん

(1) 在宅生活を継続しているDさんについて

90代女性 要介護区分3 認知症なし

夫は早くに亡くなり、1人暮らしを長年していた。もともと、娘夫婦が近隣に住んでおり、何かとお世話をしてくれている。

(2) インタビュー結果

この歳(地区で最高齢)にもなると、遊びに行くところがない。家にいても、近所の人で訪ねてきてくれる人は皆亡くなってしまった。ショートステイに来ると同年代の人たちと楽しくお話ができるのが良い。自宅で台所に立つのは、たいぎな。娘夫婦がよくしてくれているので、不自由はない。

4. 考察

今後さらに、高齢者人口は増加することが予想されている中で、認知症になる人もいれば、今回インタビューした方のように、100歳近くになっても老化による身体機能・脳の機能の衰えだけで、認知症はない者も増えるであろう。一般的に65歳以上が高齢者と言われ、その中でも今後は75歳以上の高齢者が増加すると予想されている。今回話を聞いただけでも、80代の方では、「地元Z県へ帰りたい!」など「〇〇したい!」といった積極的な意見が聞かれたが、90代になると「楽しくお話しする」や「ベッドでゆっくり休む時間」といった穏やかな生活を望む声が聞かれた。このように80代と90代の方ではニーズも異なっており、「高齢者」というひとくくりでの一律の支援ではなく、それぞれに合った支援が必要であろう。そういった中で、「老いの文化・老いの時間」について考えなければいけない時代がきているのかもしれない。

5. まとめ

今回インタビューをした方は、いわゆるサクセスフル・エイジングの方であり、マズローの欲求5段階説を充たしており、エリクソンで言えば老年期における統合が行われていた。しかし、通常の老化に加え病的な認知症になることで、自我が失われ統合することができず混乱を生む(図1)。今回のインタビューを通じて、マズローやエリクソンの研究は、現代でも意味があることであることが改めてわかった。その中で、生命維持や安心・安全を図ることだけが、高齢者介護の意味ではないと感じた。

今後迎える超高齢社会の中で、90代・100歳を超える方の「老い」の意味について考えていく必要があるのではないだろうか。

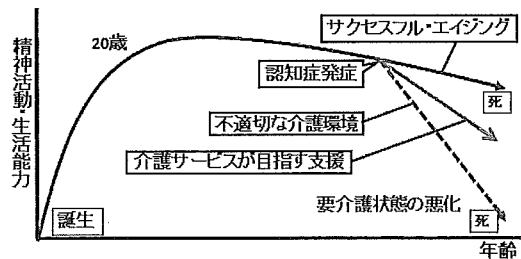


図1 老化のイメージ